

「トルコ」

(1976)

入社して六年目の事、会社が今迄に無い本格的な海外大型プラントを受注した。機械事業部には各部署から技術者が集められ、新しくチームが結成された（その後のプラント事業部の前身である）。当時本社の建築課において建物の設計をしていたが、そんな事は構い無し、「若い」「一級建築士」で「英語」が出来る（出来そうだ）という理由だけでこの世界に首を突っ込んでしまった。唯本社としても建築のエース（？）を一事業部に放送出するなど考えていないくて、本社在籍のまま一年間の「応援勤務」という事に落ち着いた。たかがプラントなど・・と散々ゴネたお陰で、所属の部長、本社の人事部、はては秘書室までが絡んでの応援部隊が僕の後押しをしてくれた。海外出張の往復時に海外の建築事情の視察という名目で欧洲・北欧の各国に立ち寄らせてもらつた（実際は観光）。今から思うとお恥ずかしいばかりのお騒がせの話である。当時は未だ海外渡航など憧れの時代、まして遙かトルコの地に一年間根を下ろすことになるとは・・・。

トルコはまさにヨーロッパとアジアの架け橋の地、人種的にもヨーロッパ人とアジア人の混血だから、女性は震える程の美しさ。歴史的にもギリシャ・ローマ文明とイスラム文明が混ざり合い抗争を繰り返した歴史の宝庫もある。若き日のコルビュジエが「東方への旅」でトルコを訪れ大きな啓示を受けたとも言われている。

「トルコ紀行」

トプカピ宮殿

トプカピの丘 雪の中アジア見ゆ

王妃の間 ニ十世紀の落ち葉舞う

雪の空 トプカピ宮殿庭明かり

水音の中の祕め事 王妃の間

王の間の窓越し 庭の雪明かり



ボスフォラス海峡

船降りてケバブのにおう冬の町
海峡を隔て アジアの雪煙る
蝶舞うや 晴き戦史の地中海

海峡を隔て アジアの雪煙る

行く年やガラタの橋の物語

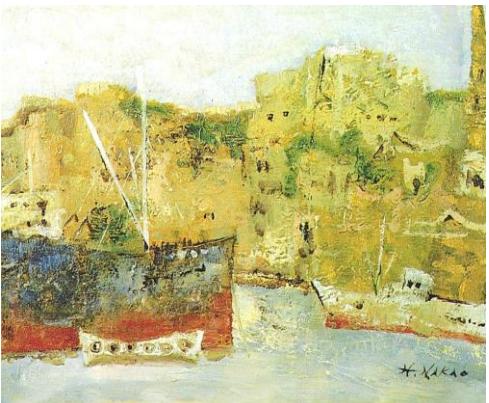
粉雪舞う 波間は暗きボスフォラス
海戦の痕消す冬のボスフォラス

船降りてケバブのにおう冬の町

海峡を隔て アジアの雪煙る

行く年やガラタの橋の物語

五月雨の坂の街なりウシュクダル



黒海

黒海を見下ろす丘の秋の風
黒海に肌焼けば幼女歩み寄る
秋の坂登れば黒海見ゆるべし
春近し黒海見むと丘登る



モスクの祈り

拵声器 祈りの声の地に凝る

モスク冷え 白き祈りの民の息

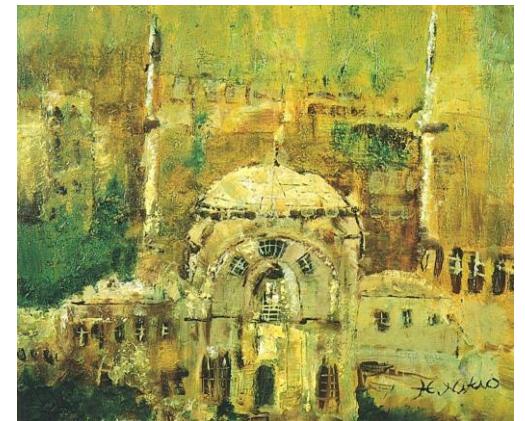
襟巻きをはずして今日の野の祈り

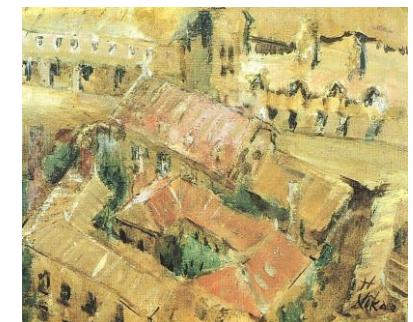
コーランは終わらず冷える手に吐息

村の風景



オリーブの低き群落古き村
寒き村 異人を招き熱きチヤイ
異人見る襟巻き越しの女の目
太鼓鳴り 割礼祭の子ら正装
割礼の宴 華やぎてジヤズ響く
夏の昼マリヤ生まれし村有りき
雨の村 泥にまみれし群れ羊
異人見る襟巻き越しの女の目
夏雲や地中海の村無言
雨の村 泥にまみれし群れ羊
尖塔の村 アナトリアの空澄めり





古代遺跡

石積みの城址崩れて蛇苺

石積みの要塞の街 秋高し

千年の石の碑文に秋入り日

秋澄みて白き女神の石の像

城凍てし 時間の止まる跡を見る



千年の石の碑文に秋入り日

夏の昼マリヤ生まれし村有りき

ま い は

秋の風 古代劇場舞い爆ぜる
秋天を見つめ ミナレの段上る
蝶舞うや 暗き戦史の地中海
戦無き海の城壁 風光る

野薺の坂を上れば石の城



トロイ遺跡

石積みのトロイ要塞すすき風

蝶狂うトロイ遺跡の真昼時

石積みの城址崩れて蛇苺

